

# 地域の自己決定と社会教育

組原 洋

## はじめに

本稿は、1996年度に、私が社会教育に関連したことをまとめたものである。同じ趣旨で、1995年については、「地域づくりの社会教育」としてまとめた（本研究所年報第7号所収）が、本稿はそれに続くものである。本文に入る前に、題名の趣旨を簡単に説明しておく。

周知のように沖縄は、96年は全国的に注目された地域だった。内容的にはそれは、「地方分権」の流れの中で把握できる問題だった。言い換えれば、地域の自己決定の問題である。

たまたま、96年度から、沖縄大学では、法学科と経済学科の共通科目として自治体学入門という講義と、自治体実習が設置された。

自治体学入門は、自治体行政の現場に精通している方々を講師として招き、講義をやっていただくことを中心的な内容としている。96年度は、市長を含む那覇市の職員に講義をしていただいた。それが終わった後、今度は市民サイドから見た自治体行政ということで、社会福祉協議会、市民運動、あるいは外国人等様々な立場から、やはり現場に詳しい方々を招き、自治体行政のあり方を検討してもらった。私は、この講義の大学側担当者だった。

自治体実習は、現場に学ぶという自治体学入門の趣旨をより徹底させるべく設置された科目である。96年度は、8名の学生が、糸満市、南風原町、大里村の3市町村に分かれて実習したが、その事前指導も私が担当した。

こうして、私は96年度中、自治体の現場にいる様々な分野の方々のお話を直接聞く機会に恵まれ、

啓発されるところが大きかったが、いつも、社会教育との関連を頭において考え、行動していた。特に自治体実習で、事前指導をお願いした具志頭村の上原文一氏、名桜大学助教授（前名護市職員）の中村誠司氏は、社会教育との関係で知り合った方々である。中村氏には、自治体学入門でも、「シマ社会と地域自治」と題して講義していただいた。

96年8月に埼玉で開かれた、96年度の社会教育研究全国集会に参加したときも、以上のような関心を持って参加した。この前後のことを、日記をもとに再構成したのが本稿Iである。

社会教育研究全国集会でのごことが直接のきっかけになって、私は、96年9月、北アイルランドを含むアイルランドとオランダを旅行した。この旅行記が本稿IIである。

この旅行中に、沖縄で県民投票が実施された。沖縄に帰ってから、たまっていた新聞をまとめて読んで一番感じたのは、事前に投票率が一番問題にされ、具体的に数字で目標ラインが出されていたが、実際にはそれよりはるかに低い投票率だったということである。ここらあたりのことも、実は、社会教育との関連で考え続けてきているが、本稿では割愛した。いずれ別稿で考察してみたい。

## I 96年社会教育研究全国集会の前後

1

1996年8月3日（土曜日）、朝、名護の中村誠司氏に8月10日の事前指導をお願いしたら、引き受けてくれた。名桜大学でも企業実習を計画しているとのことだ。まとまった話を文書にしてから、

9時前に学生の仲宗根和乃さんに乗せて具志頭に行く。7名が9時半にそろそろ。上原文一氏の指導で、まず具志頭村役場のハード（形）の問題点を学生に見つけさせる。形の奥に潜んでいる問題点を上原さんが説明する。なかなか面白かった。彼は今健康保険課の課長だが、「保険」ではなく「保健」とすべきだと主張しているんだそうである。一昨日、上原さん宛の文書を作成したときに肩書きをどっちにすべきか迷って「保健」にしたのである。それから、多分彼の持論だと思うが、問題意識を持つことと、住民のほうを向きなさいということを用いる。しかし、問題意識を持ったとき、回りがみんなバカな場合どうすればいいか。それから、住民自身が問題意識が低い場合はどうなのか。こういったことを私から質問したが、明瞭な返事があったのかどうか。学習としては楽しかった。成功と思う。ちょうど12時に終える。帰りも仲宗根さんを沖縄女子短大近くまで乗せる。それから大学に行って教務課長と話した。実習までの段取りはだいたいできた。満足できる。くたびれたがよかった。学生達には、糸満市からの要望で、保険をかけるが、1人3000円になるそうである。仕方ないな。

## 2

10日（土曜日）、9時半に大学に行く。教務部長小川竹一氏の車に女子学生3名、私の車に男1人乗って出発。台風が近づいていて、風が強かった。時間がないのでかなり飛ばした。11時過ぎに名護市民会館に着く。男1人は車で来ていた。ロビーで中村誠司名桜大学助教授の話をきく。12時半に車で宮里そばに行って食べ、それからまた市民会館に戻って、2時半までやる。終わってから、名護の喫茶店で女子3人と一緒にコーヒー。それから、大学に帰る。

## 3

19日（月曜日）、8時20分頃南風原町役場に行く。9時に総務課に行くとお実習する小野正人さん

と仲宗根和乃さんはもう来ていた。係の大城静男氏と話していた。配属部署が決まって、それぞれが1週間ずつ2つの部署を経験できるようになっていた。大変結構である。今日は、挨拶の後、南風原町内を回るということだったが、町長が来ず、総務課長と助役に挨拶しただけだった。そこまで私の仕事は終わりのはずだったが、大城氏がついてきますかというので、一緒に南風原町内回りについて行かせてもらった。建設中の陸上競技場、公園、公民館等を順に回る。意識的に小さな道を走ってくれたので、大きな道路裏にある部落の様子がよく分かり、大変興味深かった。役場の表の組織と部落の裏の組織が二重になっていて、部落の集まりは夜に行われるようである。民家のような字公民館は生き生きした感じがした。児童館も4つあるそうで、立派なものだと思う。最後は陸軍病院跡。とにかく蚊が多く、また泥の坂道等もあり、仲宗根さんはせっかくきれいなハイヒールを履いてきたのにさんざんだった。また、ストッキングをはいた足も蚊に刺されたあとでいっぱいだった。陸軍病院のあと、まだ11時過ぎだったが、喫茶店風のレストラン（以前、ゼミのコンパで来たことがある）に入った。ここでランチを食べる。大城氏の前の部署は税金関係だったそうで、そういった話にはめっぽう強いらしい。仲宗根さんが最初に税務課に配属になったのも、そういうことが影響しているようである。12時半に出て、いったん役場に帰ってから1時に私は失礼した。

## 4

23日（金曜日）、12時10分発の全日空84便で上京。小平の家に行く。

24日（土曜日）、弟、母と車で買い物に行ったあとすぐに出て、国分寺、西国分寺、そして武蔵野線に乗って南浦和に行く。西国分寺・南浦和間は31分。乗った電車は、東京行きで、ちょっと意味が分からなかったが、要するにぐるっと回って東京まで行くんだろう。「東京ドリーム」と書いてあった。12時15分頃に南浦和について、構内でとろろそばを食べてから、浦和市文化センターに行く。

受付を済ませ、埼玉大学の松田武雄氏に妻から頼まれたちんすこうを渡し、本を買ってから第一全体会に出る。「いのち輝く時代へ」というのがキャッチフレーズだそうだ。島田修一社全協委員長の挨拶は短かった。来賓挨拶のあと、大田 実行委員長がその趣旨を説明した。もっともな内容であるが、もっとも過ぎてパンチを感じない。皆違うかけがえのない命、というところから始まって、関係の中での存在ということと言われた。それから、それに関連するテーマが続いた。上手にまとめられていると感じた。都会だなあ。

4時から課題別セミナーで、私は「自治体再編と社会教育の課題」に出た。都留文科大学の中西啓之氏の講演「自治体再編と社会教育の課題」のあと、門脇一生氏の富士見市水谷東公民館の「まちづくり白書」の取り組み報告、八景秀一氏の「合併・政令指定都市で何がどう変わる」パンフレットを発行して、という2つの報告。いずれもきわめて面白かった。自治体学入門の前期の最終回の講義で親泊那覇市長自ら述べたように、那覇市は中核市になりたがっている。大きくなってどうなるのというのが今一つ分からなかった。課題別セミナーでの3氏の立場はだいたい共通していて、小さいもののよさをもっと見直すべきではないかということだと思う。ただ、社会教育サイドでどういうことをすればいいのかは、さあどうですかねえ。

6時40分頃終わってまっすぐ駅に行くのと電車がすぐに来た。西国分寺まで行かず新小平でおり、青梅街道まで歩き、西武線に乗って帰ったら7時半にはついた。すごく乗り継ぎがうまくいった。家に姉が来ていた。風呂に入って夕食。母は、元気と言えば元気だが、怒りっぽいし、時間を気にする。母はパーキンソン氏病だそうだが、これで難病指定になると治療費が全額タダになるそうだ。ヘルパーさんは、2時半までは市からの人、6時まではボランティアグループの北さん。さらに、木曜日は以前のデザイナーに通えることになったそうで、この3者が家に来て、時間調整等をしたのだそうである。大したもんだと思う。入院していたので母の股の脂肪がそげ落ちている。しかし、転ばないように注意して

いれば、やがて歩けるのではないか。今は、1人で立ち上がるのが難しい。イスを使うようにしたらラクではないかと思う。ともかく、弟がいない間はヘルパーさんがいてくれる態勢になっていて、そういう意味では私はいなくてもいいし、実際、社会教育研究全国集会にも出ていいそうだ。平日の昼間はむしろいない方がいいかもしれない。問題は夜だろう。足がしっかりするまではいたほうがいいのか。もうちょっと様子を見てから決めたい。

## 5

25日(日曜日)、7時頃出る。青梅街道まで西武線で行き、新小平から、武蔵浦和経由で8時過ぎに南与野に着く。歩いて埼玉大学まで行く。まっすぐな道だから迷う心配はないのだが、結構距離はあって、30分はかかった。9時から分科会。「地域づくりネットワークと社会教育」に出る。これは、去年の地域づくりの分科会にネットワークを加えたもので、世話人等は同一である。今年の見学報告者は2人で、1人は、「わがまち新座を考えよう」市民ネットワークの竹森絹子氏で、テーマは「市政への市民参加をめざして」というものである。もう1人は、市民版日野・まちづくりマスタープランを作るのに加わった人である。竹森氏のレジュメは資料集に載っているのだが、その資料集を忘れたのである。話にならんあ。でもまあ、隣の人のものを横から眺めながら聞いていたらいいたいつかめた。もう1人は、資料集には載っていない人で、この方は、明峯哲夫という人が作成したB4表裏に印刷した2枚の資料をもとに話された。この資料は他の方々は皆もっているのに私はもってなかった。多分受付の際に、出席する分科会欄に欠席と書いて分科会受付に行かなかったからだろう。で、この方は明峯氏だと思っていたのだが、あとでたまたま帰るとき電車が一緒になり、話した際にもらった名刺から金井透氏だと判明した。金井氏はとても面白い話をされた。というか、党派性がない感じで、すごく気に入った。はっきりと、しかし淡々とした感じで話された。実際に出来たマスタープランというのが回覧されたが、

内容を見るといわゆる都市計画みたいなものというより、私はこんな町に住みたいという希望を集約したものとなっている。

「みどり」(緑地、水源、農業等)「くらし」(ごみ、住宅、上下水等)「いのち」(教育、障害者、老人福祉、外国人等)という3つの部会に分けて作業がなされたようである。私が聞いた限りで頭に残ったのは、市民というのは最初から地域のことを知ってるわけでないということ。つまり、いろいろな欲求とか不満とか、自己の関心を持った範囲で把握する。しかし、今はいろんなものが絡み合っていて、よく見えないのである。つながっているといえば皆つながっているから。だから、まちづくりなんかも、1人では出来ないってことである。それから、出来たものが決して唯一の案だなどとは思っていないということ、それを市当局にも出したそうだが、順に実現していこうじゃないかということになったこと等である。去年は報告の前だったか後だったか、参加者全員が自己紹介したのだが、今年はそれがなかった。質問があって、12時過ぎになった。

昼休みに入る前に、世話人の1人が、自分のもってきた本を買って下さいといい、それが北海道関係のものだったので買った。「協同」のための北海道集会実行委員会編集発行「協同でひらく地域づくり」(1996年)だが、ちらっと見て、この人が鈴木敏正氏ではないかと思った。昼は、私は、埼玉大学を出て近くの食堂で食べた。食後、分科会会場に戻ってきたら、その方がいたので、確認したらやはりそうだった。それで、私が地域研究所年報に書いた「地域づくりの社会教育」の別刷りを差し上げて、昨年氏の「平和への地域づくり教育」を読んだことを述べ、出来れば北アイルランドにもいってみたいこと等話したらとても喜んでくれた。

午後も論議が続いた。というか、いろんな実例の話がなされたが、午前中から質問したりした人が多くて、話す人がだんだん決まってきた。多分30名ぐらいは参加者があって、3分の1近くは若い人だったが、それらの人々はほとんど黙ったままだった。私の記憶に残った論点は、1つは、地域づくりの市民運動に公民館職員等はどのようなスタンスでかか

わればいいのかということ。おそらくこれは毎年論議されてきたことと推測される。地域の課題をどのような形で提示していったらいいのか。もう1つは、ネットワークの定義ですね。これが最後まではっきりしなかった。ネットワークとシステムはどう違うのかとか、ネットワークの種類とか、その評価とか。鈴木氏が何度も発言されて、その点をはっきりさせようと言われたが、どうも一人歩きたいだった。私には氏の言われたことはとてもよく分かったのだが。

論議中に3枚ほど自己紹介カードが配られた。司会は3時前頃からこのカードを見ながら指名し始めた。しかし、人数から考えて全員がこのカードを提出してはいなかった。私も紙をもらわなかった。どうも飛び入り参加者への心配りがなく、何というか、訳知りだけで論議をしているみたいに、ひがみかもしれないが感じた。社全協会長の島田修一氏は今年もいたが、終わりに近くなった頃、高齢化社会とか待ったなしの大きな問題を突きつけられた状況の中で、我々は豊かな学びのネットワークを作っていかなければならないみたいなことを総括するみたいに言われた。言い方から、これはまとめの論理としてネットワークって道具を使っているんだなと感じた。早くまとめて安心したいわけだろう。結論の急ぎすぎで、会場の皆さんも共感しなかった様子である。

鈴木氏はそれとは反対に、まとめるべき時が来ていなければいくらやっても無駄みたいな立場だと思う。世話人からして分裂しているんだな、もう。

最後は自己紹介があるのかと思ったら結局なくて、沢山の若い人が全然しゃべらないまま終わった。問題ではないか。5時過ぎに終わって、バスで南与野に行ったが、渋滞で6時10分ぐらい前に着いた。そこにちょうど金井氏も来て、話したら同方向だと分かったのである。彼は、分科会で、最初こそよく話したが後は沈黙がちだった。私にはいらいらしてのように見えた。東大工学部卒だそうで、まだ28歳。職業は社団法人環境情報科学センター研究員である。つまり、市民って言ってもプロなんですね。だから出来るんだね。彼は28歳なのに48歳の私と話は結構うまく合い、出来れば友達になりたいと思った。今日も私は新小平でおりて西武線で帰

ってきた。

6

26日(月曜日)、朝食後、8時前出発。新小平から南浦和経由で浦和に行く。歩いて埼玉会館に行くと9時過ぎだった。まだ入口が開いていないようだったので、近くの喫茶店に入ってモーニングを食べた。2回も朝食することになったが、ただコーヒー飲むのももったいないし、昼を抜くか少なくともいいだろうと思った。電車の中からずっと自分の書いた「地域づくりの社会教育」を読んでいた。昨日鈴木氏に差し上げる時にも若干躊躇があった。この作品はとにかく他人の著作のまとめの部分が多く、中でも鈴木氏の著作のまとめは相当詳しく作成してある。これじゃ自分の作品と大きな顔で言えない。しかし、改めて読んでみて、確かにメモは多いんだが、面白かった。だから、あげてよかったと思った。

9時半頃埼玉会館に行った。入口に、神戸大学の末本誠氏が立ってピラ配りをしていた。来年の大会は神戸なので一生懸命である。また、入ったところで、長門市の松本栄治氏にあった。本売場を回ってから会場内に入ると、すでに第二全体会は始まっていた。びっくりしたのは、シンポジストの1人に、海勢頭豊氏がいたことである。昨夜演奏会をやったことはピラで知っていたが、お話のほうもなさるとは意外だった。入ったとき一番目の、鶴ヶ島市富士見公民館長が話していた。題は、「埼玉の公民館の歩みとこれからの課題」である。一番前から3列目ぐらいの一番端っこに座っていたら、小林文人氏がやってきて、海勢頭氏の話の後、コメントをしてくれと頼みに来た。私なんかの出る幕じゃないように思って、保証は出来ませんが、といった感じの返事をした。

次に話したのが女の人で、題は、「今、くらしの質を問う」。生活文化・地域協同研究会事務局長だそうだが、頭に残る話はなかった。そして、最後が海勢頭氏だったが、これは圧倒的にすばらしかった。題は、「平和と自治を築く沖縄からのメッセージ」。

ごく淡々とした個人史みたいな感じで、よかった。

最後に「ガマ 月桃の花」を制作した話をして終わった。「店は保育園みたいなもの」「日本人の心は戦前も戦後も鎖国の状態だ」「人間は弱いものですからね」といった言葉が断片的にはあるが頭に残った。その後、会場の参加者に何かコメントはということで、なかなか誰も手を挙げなかった。しかし、年輩のおじさんが、海勢頭氏に何か質問し、氏はこれに答えた。私の感じでは、会場の皆さん海勢頭氏のショックがちょっと大きすぎてぼーっとしているように思われた。このままだとつながりつかないように思われたのでそれを試みようと思って手をあげた。そして概略次のような話をした。私は社会教育の専門ではなく、弁護士であり、大学で法律を教えている。この6~7年、毎年のように研究大会に来ているが、それは、社会教育関係者ってちょっと変な人が多いからである。まじめで親切なんだけど、なぜか怖い。まあそういうものを見るのが好きなので。で、海勢頭氏の店には、保育園児というほどではないが行ったことがある。皆さん、海勢頭氏の話でぼーっとしておられるようなので、つないでいくためにちょっと自治体関係の話をしてみたい。今、どこの大学でもそうだと思うが、現場に密着した教育をしようとしていろいろやっている。私は沖縄大学で、今年から始まった自治体学入門と自治体実習を担当している。で、自治体ということで現場に行くことが多い。沖縄は、朝日新聞なんかで馬車の写真が載ったりすることがあるが、あんなのは間違いで、鉄道がないせいで、むしろここ以上に渋滞も激しい車社会なのである。ところが幹線道路をちょっとそれると、そこに部落とか字とかなりの公民館なり地域センターなりが出てくる。で、自治体職員というのが実は字の役員を兼ねているということも多いそうで、字のほうの集まりは夜に行われることが多いそうである。そこでは酒も出るし、海勢頭さんのような人の歌もあるんでしょ。つまり、1人2役ということである(分科会で、市民と自治体職員の関係ということが問題になっていたことを頭に置いて)。表の世界に対して、こういう裏の世界があるわけだ。それがまだまだ健在である。島から逃げられないんだね。私は17年ほど前沖縄に

行った。その前は南米にいた。私はもともと鳥取の生まれだし、実家は小平にあるけれど、東京ってのは退屈なんですね。日本はこういう裏の世界をどんどんつぶして表の世界を拡張して、それで貧しくなった。私が沖縄に来てからの17年というのはそういう時期だった。今何もなくなってしまって、焦っている。今年の大会では、ネットワークという言葉をししば聞いた。ネットワークというのは、まとめる論理じゃなくて、結ぶ論理、つなぐ論理だと思う。ただ単にまとめればいいというのでは、もう1つ別の架空の世界をでっち上げるだけで終わってしまうし、そういう状態を海勢頭さんは「鎖国」といわれたのではないか。で、そんなじゃなくしてどうつなげばいいのか、それが課題だと思う。といった内容だったと思うのだが、例えば途中どこかで、沖縄には（保育園だけじゃなく）大学もあるといいたいと言って、海勢頭氏が大喝采してくれたのだが、どこでどういう文脈で述べたのか思い出せない。司会の上杉氏が他の2人のシンポジストに、それではつないで下さいみたいに言ったのだが、2人とも絶句に近い状態で、つなぐつもりが逆効果だったのかもしれない。でも、私の話の後、流れが変わったというか、話しやすくなったのではないと思う。

シンポジウムの締めくくりに海勢頭氏が歌を歌った。「月桃」と「喜瀬武原」。歌のことは私は分からない。これが終わった頃私の前のほうの一番前に座っていた人が来た。「月刊社会教育」の編集長をやっておられる大串隆吉氏で、沖縄関係のことをやってみようということだった。その後、第二全体会は、会場からの感想とか、韓国からの来賓の感想とかの後、埼玉から神戸へのバトンタッチ式があり、最後に大串氏の挨拶があって終わった。大串氏は、沖縄のことばかりしゃべられた。実際沖縄大会ではないかと錯覚するような内容だった。技術的な諸問題とは桁外れの、大きな時代転換期といった感じがする。会が終わったのがもう1時で、約束があったので、私は誰とも挨拶せずに出て、浦和-赤羽経由で新宿に行った。

29日（木曜日）、7時前目がさめると、何でも母が倒れていたとか。腕が痛いと言母はいう。今日は、デイサービスに行く日なので、久しぶりのデイサービスで緊張しているのかもしれない。いつもより早く朝食を終える。8時半前に、北さんともう1人知らない女性 comes。弟が家を出ると同時に私も2階にいて寝直す。起きると9時半になっていた。昨日から、このあとのことを考え続けていた。この日の午前中もずっと1階のソファに座って半分ぼーっとしながら考えていた。途中、沖縄にも電話した。オランダのバンリヤ財団と関係のある仕事をしていて返事があるはずだが、まだ連絡はないようである。バンリヤ側からの返事がないのに出かけていくのは変だが、しかし、いつになるのか、どんな返事になるのか分からないわけで、オランダ以外にも行きたいところがあれば行ったほうがいいのかという結論になった。とにかく、ここに長滞在は出来ないし、無用でもある。とすると動くしかないが、それは沖縄か、北アイルランド・オランダしか今のところ選択肢がない。後者がいい。なぜなら、今沖縄に帰ってもらくなことではない。で、とにかく具体的な情報が必要と思い、国分寺のH I Sに行く。旅程を説明すると、K L Mが安いそうで、行きはロンドン、帰りはアムステルダムということで、9月3日成田発、帰りはアムステルダムを12日発、成田に13日着でセットは可能と分かる。14万9千円。帰りの日を含め、変更不可である。しかし、例えば日本航空だと20万ちょっとである。多分これになるだろうが、弟と妻の了解を取ったほうがいいのかと思い、明日でも間に合うので保留にする。その後新宿に出て、紀伊国屋で旅行関係書等を買う。帰りにも国分寺によって、西友でプラスチック容器を買い、三成堂で旅行関係書を買う。6時過ぎに帰る。

30日（金曜日）9時半過ぎ、国分寺のH I Sに行く。昨日決めたとおりの切符を買ったが、行きは、アムステルダムからロンドンのヒースローではなく、スタンステッド空港に着く。昨日とは別の若い男の人がやってくれたが、とても親切でいいので、保険

等の手続も合わせて12時前までかかった。全部でしめて15万9070円（うち保険料は8970円）だった。夜、旅行のガイドブックを読む。アムステルダムから直接ダブリンに行ったほうがよかったかなあと思う。旅の緊張感が出始めている。

31日、私は、旅前の緊張があって、イライラ落ち着かない気持ちである。で、「旅前緊張」というファイルを作って打ち始める。毎度のことで我ながら情けない。

## II アイランド・オランダの旅

### 1

1996年9月3日（火曜日）（小平）よく眠れず、何度も起きる。6時前に起きあがる。荷物整理して、布団を上げ、母に挨拶して出発。上野から、8時10分発のスカイライナーで成田空港に行く。すぐにチェックインすると、イギリスからの出国チケットがないとイギリスに入国できないそうで、切符を、最初は東京-アムステルダム-ロンドン（行き）。アムステルダム-東京（帰り）となっていたのを、東京-アムステルダム-ロンドン-アムステルダム-東京と、つながった形に作り直してくれた。無料。新たに付け加わったロンドン-アムステルダムは使おうと思えば使えるそう。つまり、帰りをロンドンからということもできる。ただしロンドン-アムステルダムと、アムステルダム-東京との間には乗り換えの余裕しかない。大変親切。その後、3万円弱をUKポンドに両替。レートは1ポンド183円。そして、搭乗ゲートに行く。よく寝てないせいもあってイヤな気持ち。何でもまた旅なんか始めたのか、と。そういう気分でKL862便に搭乗。気分の切り替えを図るが、うまくいかない。満員に近い混み具合のようだが、隣に座った青年は、英語で書かれた言語学の本を読んでいる。すごいんだなあ。帰国子女か何かか。聞いてみた。慶応大学工学部の2年生で、バルセロナに行くんだそう。バスケットのこと、ビルバオのことを知っている。すでに昨

年行ったようである。「バスク語入門」という本も知っていた。彼は、言語の深層構造みたいなことに興味があるらしい。話していたら落ち着いた。有り難い。しかし、眠れないので、ガイドブック等を読むことにする。ガイドブックは、イギリス、アイルランド、それにオランダの「地球を歩く」を持ってきたのだが、何しろ行くと決めてからまだちょっとで、いずれもほとんど見ていない。最初にロンドンに着いてからどうするのかさえ決めてない。ロンドンに初めてでないので、別に心配はない。ただ、泊まるかどうか。旅のはじめはまず確実に時差ボケが出る。毎回これには悩まされる。時差ボケに対する私の処方箋は、ホテルでじっとしないで、乗り物で出来るだけ動くことである。ホテルの場合、早朝真っ暗な中で目がさめることになる。体が極度に疲れて眠りたいのに眠れない、そういういやな状態になる。1人でそういう状態に落ち込むとあまり愉快的な思索は期待できない。出発前にたまたまトマスキックのヨーロッパ時刻表を手に入れた。日本版が出ていてたまたま本屋で手にしたのである。これまで最初から鉄道の旅と決まっていたときは、洋書販売店で買い求めていたが、これの日本語版が出ているとは知らなかった。自分としては、今回はレンタカーの旅になるのではないかと考えていたので、そこの関係の本は探し求めたのだが、鉄道のほうはたまたま見つからなければ持ってこなかったと思う。要らなければ捨てればいいからというくらいの感じで持ってきた。これを見ていると、ロンドンから夜行でグラスゴーに行くと、朝着いて、ストランラー港まで列車があり、そこからベルファストまでフェリーが出ているのである。一方、ロンドンからはベルファストへはたくさんの飛行機が飛んでいて、当日空港でも切符が買えるようである。料金はむしろ飛行機のほうが安い。が、出来れば陸路で行くというのが私の流儀である。そこで、体が大丈夫のようなら出来るだけ夜行に乗り、駄目なようならロンドンに1泊して、翌日飛行機でベルファストに入ることにする。時刻表を見ているうちに引き込まれて、その先の計画もいろいろ立てた。ダブリンからは、フェリーでホリヘッドまで行けばそこから列車がロ

ンドンまで出ている。ただしこれも、値段はむしろ飛行機のほうが安い可能性がある。また、ロンドンからはユーロスターという列車が出ていて、ドーヴァー海峡をトンネルで渡ってからブリュッセルに至る。そこからオランダには簡単に入れる。つまり、国際移動はいずれも列車とフェリーで可能である。出来ればこの線で動きたい。

同日の午後4時過ぎにアムステルダムに着いた。オランダは日本より7時間遅い。ロンドンに着いてからだと帰りの切符の予約再確認(リコンファーム)に適切な場所がない。それで、アムステルダム空港のトランスファー(乗り換え)受付で頼むと、やってくれた。ここには日本人の顔じゃないのにとっても日本語の達者な人がいて、親切だった。空港の中に両替所があったので、ここで1万円をオランダギルダーにかえた。レートは、1ギルダーが約67円。いずれ列車でオランダに入る場合を考えて、いくらか持っておいたほうがよかろうと思ったのである。オランダは、空港の中だからはっきりとは分からないが、外で働いている人を見たりするとそんなに寒くないようだ。半袖の人もある。よく晴れていて気持ちよい。飛行場の案内時刻表を見ると驚くばかりの飛行機が飛んでいる。私はアムステルダムで、エアUKという会社の飛行機に乗り換える。予定では、午後6時に発ち、午後6時5分着である。イギリスはオランダよりさらに1時間遅れである。つまり、飛行機で1時間ほどで着く。飛行機は小さい。乗客はだいたいビジネスマンのようである。実際には出発がちょっと遅れたが、到着はそんなには遅れなかった。着いた空港は、スタンテッド空港で、初めてである。ヒースローもガットウィックも使ったことがある。スタンテッドは新しい空港のようだ。切符を作り直してもらった効果もあったのか、問題なく6か月の入国スタンプを押してくれる。空港からは、スタンテッドエクスプレスという直行列車がロンドンのリヴァプール駅まで30分おきに出ている。所要41分である。リヴァプール駅から地下鉄でユーストン駅まで行き、そこで、ベルファストまでのフェリーの分も合わせた切符と、グラスゴーまでの寝台券を買う。110ポンド(乗車券73ポンド、寝

台券27ポンド)。これはイギリスだけでなく、アイルランドでも、オランダでもそうだが、必ず、行きだけですか、往復ですかと聞く。往復割引率が極めて高いようである。結果的には私は1回も往復切符を使わなかったが、意外な顔をされることもあった。グラスゴー行きの寝台車が出るのが午後11時50分で3時間余りユーストン駅構内でブラブラしていたが楽しかった。サンドイッチ等を食べたほか、家に電話しておこうと思って、カードテレホンをかけてみた。ところが、クレジットカードでかけようとしても、カードをチェック中ですという表示が出たきりいつまでもその先に行かない。で、テレホンカードを買うことにして、窓口に行くと、カードがないそうで、かわりに1ポンド硬貨を5枚作ってくれた。それに、持っていた硬貨も加えてかけると、まあまあ話ができる程度持続した。こんなことをやっているうちに、列車内で飲もうと思っていたビールとミネラルウォーターが入っているビニール袋がなくなった。想像では、盗まれたのではなくて、頻りに掃除をしている掃除係がそのままいただいちゃったんだと思う。やっぱり、旅が始まったばかりでスキがあるんだろう。

11時過ぎに列車に乗った。2等寝台だが、2ベッド1室になっている。ほかに人は入らなかったのでも1人で使った。室内に洗面器があり、洗面道具もある。この列車はカレドニアンエクスプレスというそうだが、後にロンドンに帰ってきてからこの列車の広告を地下鉄駅で見掛けた。週末にスコットランドで遊ぶには非常に合理的と言える。まだ発車しないうちに、ビールを飲んで横になったらそのまま寝てしまった。8時間も1日が伸びたんだから仕方ない。

## 2

4日(水曜日)、午前2時に目がさめる。時差ボケはきつい。4時ごろまで何とか横になっていたが、気分が落ち着かない。4時過ぎに起き上がる。でも、先の事ばかり考えて、ますます落ち着かない。と記録にはあるが、何を考えていたのか今は記憶にない。



旅の始めというのはこんなもんだというしかないだろう。ただ今回の旅は、最初から落ち着かなくさせるような要素をたくさんかかえていた。出発できたのが、いわば皮肉な偶然のおかげなのである。ごくかいつまんで説明すると、沖縄から東京に出る前に妻とけんかした。そのしこりが残っていて、沖縄にはできるだけ遅く帰りたいかった。東京では、母が老人専門の病院から退院したばかりだった。足の骨の補強手術後リハビリを終えて帰ってきたのである。ひっくり返ったらまた骨折するから絶対にひっくり返らないようにと医者から言われたそうだが、私に来てからも何度かひっくり返ってしまった。しかし、もともと足は強いので、どんどん歩いて、その結果歩きすぎて足が痛くなってしまふほどだった。そういう状況で、平日の日中はヘルパーさんが来てくれた。私が居ると邪魔である。週末は私がいたほうがいいし、夜もいたほうがいいのだが、朝8時半から午後6時まで出かけているっていても、非常に難儀なことである。定年退職後のお父さん達の気持ちがよく分かった。母と住んでいる弟がそういう立場を理解してくれ、また、週末は横浜の姉が来てくれることになり、平日の夜が心配ではあったが、まっ、私はいったん寝ると朝まで起きないので、介護はどうせできないが。14日にしかし弟は夜演奏があるとのことで、13日に帰ってくれば14日、そして敬老の日と代休と3日間母をみるできるので、思い切って出発したわけである。ところが、何のための旅かということについても固まっていなかった。

2つの用事があった。1つは、北アイルランドのベルファストに行って町の状況を見ること。もう1つはオランダのハーグにあるバンリヤ財団を訪問すること。この2つの用事をつなげた。ベルファストのほうは、社会教育関係の興味からである。95年度に興味を持って以来、実際に行ってみたいと思いつけていた。それが今の時期になったのは、出発直前に浦和で開かれた社会教育研究全国集会に参加した際、鈴木敏正氏に会って話したことが大きい。氏は「平和への地域づくり教育 アルスター・ピープルズ・カレッジの挑戦」(筑波書房・

1995年)の著者である。それが弾みになったし、実際、氏にも行きたいと思っているとはいったが、まさか今とはといった感じで、準備らしいことは何もできなかった。

また、バンリヤ財団というのは、私は弁護士として、沖縄地域児童文庫連絡協議会の運営問題に関与しているが、協議会に資金を提供している財団である。そこに顔を出すということである。そのセットができないうちに出発することになった。というのは、もう待ちきれなかったということもあるし、実際、遅くなりすぎると出発自体が難しくなるだろう。私としては、バンリヤ財団と意味のある話しができることも結構だが、それは文書でもできる。一番興味があったのは、沖縄に資金をくれているバンリヤ財団って、どんな組織なのということで、それを、まあ建物からはじめて、背景全般を見てみたかった。これだけの材料で旅行が始められるものかどうか、私も迷いはした。が、動き出してしまっていたのですね、実際のところ。ならぬ旅ならどこかでつぶれるだろうと思っていた。それが、つぶれなかったのだ。

時刻表では朝6時40分グラスゴー着であるが、実際にはもっと早かった。ほとんど着きかけたところに、車掌さんが朝食を持ってきてくれた。朝食が出るのである。乗る際にコーヒーか紅茶かと聞かれた。さらに、グラスゴーに着いてからも、確か8時までは列車内にいてもいいということだった。実際、グラスゴーについてからも誰も降りないのである。まだ寝ているか、食事中なんでしょう。私は7時13分発のストランラー行き列車に乗り換える。すいている。出発すると、すぐに緑一面の風景になる。羊の牧場。最初は眠かったが、だんだん目がさめてきた。この列車で感心したのは、ローカル列車なのにトイレが電動式で、ボタンを押すだけで開閉できたことである。中は広かったので、障害者も使えるように配慮してあるのだと思う。段差もなかった。9時半頃にストランラーに着いた。ほとんど待つ間もなく、フェリーに乗る。STENAラインという会社の船である。乗ってみると、とても大きな船で、中を歩いていくと次々に遊技場みたいなのが出てく

る。わっ、遊びの船か、と思ったが、慣れてくると  
そうでもない。派手なだけ。最初は着かななかった  
が、船内の店にベルファストの地図を売っていたの  
で買って、サンドイッチを食べながら見る。だいた  
いつかめてきた。船は11時半頃にベルファストの  
港に着いた。無料バスが町の中心部まで出ていた。  
これに乗る。たいした距離ではない。ストランラー  
までの列車の中から一緒だった、大きなバッグを持  
ったおじいさんにどこから来たのかねと聞かれた。  
私も同じ質問をすると、「アメリカ」だそうである。  
旅行者とは見えず、地元の人と思っていた。同じよ  
うなことが今度の旅行中何度かあった。おじいさん  
は、欧米の旅行者が決まって持っているガイドブ  
ックをバスの中で読んでいた。バスを降りて、方向は  
分かっていたので、すぐに、「地球を歩く」のイギ  
リス篇に載っていた、アーニーズバックパッカーズ  
というドーミトリーの宿を目指した。町を歩き出し  
て一番最初の印象は、コンパクトで歩きやすい。中  
心部に銀行があったので、まず両替した。ここで、  
1989年だったか、それより前の100ドル札は  
両替できませんとあり、後にアイルランドでは、  
100ドル札はだいたいどこも皆だめだった。偽札  
が出回っているんでしょう。それから、アーニーズ  
に向かって歩いたが、中心部の建物は軒並み空っぽ  
である。TO LET という張り紙が貼られている。  
IRAの爆弾闘争が終焉して戻ってきていたものが、  
再開とともに逃げていっているのではないかと思う。  
さびしい感じ。クィーンズ大学のすぐそばにアーニ  
ーズはあるが、しんとした街を歩いていて、果し  
てやっているのか不安になってきた。1キロちょ  
っと歩いて着いた。やっていたが、入り口に満員と書  
いてある。まいったな。その入り口に、北アイル  
ランド1周ツアーの貼り紙があり、これに興味を感じ  
たのでブザーを鳴らした。若い女の人が出てきて、  
ツアーは明日あるというので、申し込みたいとい  
うと、電話して、予約してくれた。朝8時に、ここ  
から出発というのである。こんな小さな宿からとい  
うのがよく分からなかったのだが、とにかくそういう  
ことならこの近くに宿を取りたいんだがというと、  
地図のEglantine Avに印をつけて、ここにたくさん

の安宿があると教えてくれて、1つ推薦もしてく  
れた。で、500メートルぐらいさらに歩いてその通  
りに出て、探していった。推薦の宿は満員だったが、  
そこに行くまでに、その通りに確かにたくさんのゲ  
ストハウスがあった。で、推薦の宿に一番近いとこ  
ろに入ったら空いていたのでここに決めた。通りの  
名前をそのままつけたEglantineゲストハウスであ  
る。後で、「地球を歩く」のアイランド篇に載っ  
ている宿だと分かった。探しながら歩いてきたとき、  
東洋人がこの宿に入った。まさか日本人とは思わな  
かった。ところがこの人は日本人だった。旅の始め  
で緊張しているところで日本人と一緒になれてすご  
く落ち着いた。ここに来るときも通った、ヨーロッ  
パホテルという最高級ホテルの隣にオペラハウスが  
あるが、そこで演奏するために来て泊まっていると  
いうことだった。相首賢一朗氏である。すごく運が  
いい。で、宿の前に公衆電話があるので、コインで  
沖縄の家に電話して、場所を教えた。宿に帰ってち  
ょっとして沖縄から電話があり、コインの心配をし  
ないで電話することができた。実は、着いてすぐに  
部屋の中にある洗面台で洗濯を始めたところにおば  
さんが無線電話を持って入ってきて、どうも室内で  
洗濯するのはまずいなと感じたので、近くにある洗  
濯屋に持っていった。量が少ないので、ズボンとか  
もやってもらって3.5ポンド。午後5時にできま  
すと。その間散歩することにして、ケーキにコーヒ  
ー飲みながら地図を見たりした。しかしとにかく眠  
いのである。歩くのは無理と思い、5時までとにか  
く寝ないようにしながらホテルにいて、洗濯物を受  
け取ってから、水やビール等を買って戻りちょっ  
と一眠り。のつもりが、目がさめるともう夜中の  
12時だった。ビールをちょっと飲んだらまた眠く  
なり、朝4時半まで寝た。

### 3

5日(木曜日)やっとまとまって寝ることができ  
て元気になった。7時過ぎに宿の食堂で朝食。ゲス  
トハウスというのはイギリス式のベッド・アンド・  
ブレックファストのこのようである。私が一番で

ほかに人はまだ出てこなかった。食べてすぐに、アーニーズに行く。入り口のところに立って待っていると中から犬を連れた若い男性が出てきて、中に入れてくれた。入って左の部屋で待つ。ロビーのようだが、寝袋がある。昨夜誰かが寝たんだと思う。やがて次々に若い人たちが部屋に入ってきて、さらに奥の部屋に入っていく。そこが食堂なんだろう。やがてまた私のいるところに戻ってきたが、その中の大柄なお兄さんがそれではそろそろ出かけようかと。アーニーズの前に止めてあったワゴンに乗って出発。

最初は私1人だったが、街の中心の、ユースホテル前で3人の女性が乗った。いずれも白人である。それから、市を抜けていった。ちょっと行ってからアルスター大学が出てきた。ここだったのか。ワゴン車はもちろんそのまま走り続けてBallycastleという海岸の砲台にまず行った。見なさいといわれても寒いし、興味も湧かない。他の人達もちょっとで車に戻る。それからちょっと走って、Carnloughというやはり海岸沿いの集落で車を停めてコーヒーを飲む。集落の外れに立派な公衆便所があったのでここを使ったほかは道路に立っていた。

来てみて、アイルランドの顔ってよく分からないな。太っている人がそれなのか。とにかく、何もイギリスと違わない感じがするのである。景色だってそうだ。手入れが行き届いて、庭園のような風景が続くのである。北アイルランド全体の大きな地図はついに買わなかったの、どのへんかよく分からないが、このあと、いろんな景色を見た後に行った場所にアーニーズと提携関係にあるホテルがあり、そこで若い女2人が降りたのである。だんだん分かってきたのは、アーニーズをはじめ、いくつかの提携ホテルがあり、そこを回りながら宿泊客をピックアップし、ついでに我々のようなツアー目的にも応じるということらしい。残ったのは私と、中年の女の人で、聞けば「アメリカ」からやってきて、仕事は図書館員だそうだが、そっけない。そこからまた走って行ったところは、Carrick-a-rede Rope Bridgeといって、要するに絶壁の前に島がありそこにロープの橋が架けてあるのである。非常に揺れて怖い。運転手はどこかに行ってしまったので、アメ

リカの女の人と観光することになったのだが、まあ我ながら変なことをしていると思ったものだ。

車を降りたところに戻ってきて、車を待つ間、そばにある小屋に入るところが有名なナショナルトラスト関係の場所だと分かった。それから、有名なジャイアンツコースウエーに行った。「地球を歩く」のイギリス篇によれば、「6千年前の火山活動で流出した溶岩が冷えて3万7千本の正六角形の石柱になり、びっしり群がって、あたかも舗道のごとく8キロ以上続いている。」現場ではそんなに大きく感じなかったが、8キロあるのだから、ずっと続いているわけだ。その後多分、Portstewartという、やはり海岸沿いの街に行き、そこで、やはり類似の宿に泊まっていた若い女性3人を乗せた。うち2人は東洋人であるが、日本人ではない。多分韓国人だろう。中年のアメリカの女性は、ツアーがいいかげんだということ運転手に苦情を言っていた。本当にそうなんだが、私は、ジャイアンツコースウエイとデリーに行ければそれでいいと思っていた。そのデリーに来たが、やはり類似のホテルで何人かが降り、何人かが乗ると、町の中心部には入らず、Uターンしたようだ。ちょっとひどいなあ。もらったチケットからすると、Dungiven、Omaghを經由して帰ったらしい。とにかく途中、もう1箇所、ホテルに寄った。回った場所はだいたいナショナルトラスト関係のところが多かった。若い人たちがこんな風にして動いてるんだなということも分かって、まあ収穫がないわけではなかったが、あらかじめ分かっていたら自分1人で動いただろう。レンタカーが一番いいと思う。

午後7時半頃帰ってきた。この時間ではまだ明るい。留守中妻から電話があり、公衆電話でもう一度沖繩からかけてくれるよう頼んだ。用件は2つで、1つは、沖繩国際大学からアルスター大学に研究で来て滞在している先生がいるのでコンタクトが取れないか、妻に調べてもらっていたのだが、この先生の所属場所は分かったが、電話とか直接の連絡先は分からなかった。もう1つはオランダのバンリヤ財団の件で、現状の説明を受けた。電話の後、ビールを飲みながら今後の予定を考えた。実は、ゲスト

ハウスの予約が満員で、明日は出るようになっていた。宿をどこか別のところにとって、沖縄国際大学の先生を訪ねることがその時はひどくおっくうに思われた。オランダのほうは、私が行ったほうがいいのかどうかははっきりしない、というか、行かないほうが無難みたいだった。私としては仕事抜きでもオランダは一度見たかったが、あんまり長くいても時間がもたないのではないかと心配した。今考えるとピンとこないのだが、疲れているときってこういう発想をするのである。で、今日動いても感じたのは、アイルランドがどういうところか分からないと、ベルファストのことも分からないということである。実際、まずダブリンに入るべきだったのかもしれない。それでまずダブリンを見て、それからもう1度ベルファストに戻るかオランダに行くかを決めることにする。だいたいこういう線に落ち着いた。

下のロビーのソファに座って考えていたら相曽さんが顔を出した。彼も明日スコットランドに友人の結婚式に行くそうだ。彼はもう7年か8年ロンドンで生活している。ロンドンで音楽の勉強をしてそれが終わってからもロンドンにいたのだが、ビザの関係でちゃんとした形の就職が必要になっていて、多分ロンドンでその職は見つかるようだった。多分なんでも1人でやるタイプの人なんだと思う。外国で生活するのが好きだとおっしゃったが、本当にそのように見えた。私ができればやりたいと思ってきた生活である。私も、これからの予定を説明したが、それだけでなく、法人類学のこととか話して、相当遅くまで話した。

#### 4

6日(金曜日)、やっぱり4時に目がさめてしまう。継続して長時間眠れない。時差ボケの典型症状だ。7時過ぎに朝食を食べていると、相曽氏も出かける支度をして降りてきて、パンをちょっとかじっただけで予約したタクシーが来て出発した。聞いたからタクシーはそんなに高くない。私も7時半に出た。ベルファストの町をもうちょっと見てもいいんじゃないかという思いはあった。特に、全然カトリック区域に足を踏み入れなかったのは心残りだった。どうも旅の調子が出ないうちに来てしまったのがまずかった。しかしまた、「トラブルズ」というのがピンと来なかったのも事実だ。地元の人には当然それぞれに意見を持っているだろう。しかし、旅行者としてちょっと首を突っ込んでみるみたいなセンスでぞかないほうがいいのではないかという気がした。まあいずれ行くことになるんだろうからと納得させて、カトリック区域のほうには向かわずに、まず中心部に出て、それから駅に向かう。

駅近くに大きな市場があったが、品は豊富ではない。タクシーがあれば拾って8時発の列車に乗る予定だったが間に合わず、9時半発の列車になった。実際はセントラルステーションに行かなくても、宿からそんなに遠くないボタニック駅に行けば間に合ったのだが、まさか止まるとは思わなかった。1時間余り駅で待った。今考えると疲れていたんだろうね。通常の私からはちょっと訳が分からない。とにかくダブリン行きの列車に乗った。すいている。車内は座席が向かい合っていて間に机が置いてあり、つまり食卓に座っているみたいな感じである。途中工事中のようでちょっと遅れたが、とにかくDundarkという駅でアイルランド共和国に入ったようである。というのは駅名が、まずゲール語らしい表記の下に英語でも書かれている方式に変わったからである。

出国手続きも、入国手続きも何もなかった。従って、パスポートにスタンプを押すとかの手続きもなかった。アイルランドはイギリスから入ると国内扱いになるというのは本当だった。景色の様子は、あくまで私の感じだが、おおらかになった。イギリスの景色が隅々までピシッとしていて疲れるのに比べると隙間があるのではないか。列車は12時15分頃ダブリンのコノリー駅に着いた。駅では100ドル札が両替できた。レートは1USドルが0.5774アイルランドポンドだから、1アイルランドポンドは約190円ぐらいになる。まだ時間は早い。余裕を持って歩き出す。「地球を歩く」のアイルランド篇に、駅からそんなに遠くない場所に

あるゲストハウスがあり、まずはそこに行ってみようと思った。「地球を歩く」に載っているダブリンの地図のちょうど一番右端に駅があり簡単に行けるように見えたのだが方向が分からなくなった。適当に歩いていく。やがて繁華街に出る。Talbot Streetである。探していたゲストハウスはその通りであった。だが、いかにも立派。とても私なんかが入る宿じゃない。歩いていけば適当な安宿があるだろうと、ぶらぶら歩いて行った。

オConnell Streetに出た。渡ってからさらにいくと道路を使った生鮮品市場が出てきた。色とりどりで大変な活気である。それを見たら一遍に元気が出た。やあやあ、楽しい町らしいな。さらに歩いて行って途中銀行が出たところで両替した。100ドル札がだめだったので、日本円で両替した。お札のコピー一覧表を見て確認しているのには苦笑した。それから方向を南のほうへ変える。やがて川が出て橋を渡る。渡りおわたったところがテンプルバーといって観光の中心地のように、とにかくすごい人なのである。これだけ観光客がいればどこもかもすぐに満員になるのではないか。何でもいいから早く宿を確保したくなる。と出てくるのは、立派なホテルばかり。安いB&Bはバスに乗ったりしてちょっと離れているんでしょう。私はそんなに長くいるわけでもない、駅の近くがいい。最初に目指したのもいいじゃないかということで、戻っていく。

結局、時計の針の反対方向に中心部を一周したことになった。戻ってきて、最初に目指したゲストハウスに行ってみると、満員である。その代わりすぐそばに宿があると教えてくれて、そこから駅の方角に向かうとB&B街が出てきた。いやあ大変な数だ。角の宿に入ってみると部屋はあった。フロントのあるところの奥である。まさかこんなところに部屋があるとは、といった感じで、中は細長い。でもまあ、寝るところがあればいいんだから。ただし、予想に反して30アイルランドポンドもする。多分、ダブリンは観光ブームで、ホテル代が高騰しているのではないか。週末だからこんなに込んでいるんだとすると、日曜日にイギリスに移動するのに、飛行機の切符はとてもじゃないが満員ではないか。ともかく

あたってみようと思い、旅行社を探していく。オConnell Streetの店に入って聞いてみる。値段は、ロンドンのどの空港に到着するかで違って、スタンテッドだと55ポンド、ガットウィックだと65、ヒースローが104だそうだ。安いほうからあたってもらったら、スタンテッドもガットウィックも満員で、ヒースローしかなかった。それを買う。出発は日曜日の午前11時15分である。これで決まったわけである。すぐに疲れるのでフェリーはやめにした。疲れているとどうせ何も見えない。不確定状態が一番疲れる。そうなのだ。実際、決めてしまったら、町の楽しい空気がすぐに伝わってきた。とにかくびっくりしたのは人々の、表情というか、感情がもろに出た顔がいっぱいということである。その感情もさまざまである。夢中に何か思いつめたような顔もあれば、とにかく楽しくてたまらないという顔もある。皆正直な気持ちが出ていると思った。

イギリスでは無感情の顔ばかりだったのに。実際、これからすれば、私が見た北アイルランドはイギリス以外の何ものでもない。街を歩いて感じたのは、多分働いてない人がたくさんいるのではないかということ。失業者が多いんだろう。沖縄みたいなのだ。そして、乞食が所々に座っているが、決まってそんなにふけてない女性で、赤ちゃん連れである。哀れな感じはなく、栄養は摂れてる。例えばお金を置いていく人があっても、赤ちゃんの面倒を見るのに忙しくてお礼も言わないという場面もあった。カトリックで、現在どうなっているのかよく分からないが、少なくとも最近まで離婚もだめ、避妊もだめの国であったはずである。ガイドブックにFAXを送れる店が書かれている。その店に行ってみると確かに送れるというので、紙をもらって今後の旅程を書いて沖縄に送った。3ポンドぐらいだったか、とにかく安かった。かなり歩いてから、食べ物と飲み物を買ってホテルに戻る。共同シャワーを浴び、それから食事する。確かに安宿だが、電熱器のついたやかんがあり、お湯が沸かせる。紅茶パックも置いてある。これはすばらしい。水を買わなくても済みます。カメラのフィルムを出すのに失敗して1本目はペアになったが、どうせろくな写真は撮ってない。全然惜

しくない。8時前に寝た。

5

7日(土曜日)、6時半頃起きた。何とか継続して眠れるようになってきた。8時半頃、部屋に朝食を持ってきてくれた。食堂がないのである。今日は何をするか、特に決めてない。とにかく1日うろつきまわってればいい。10時ごろに出て、まずオConnell通りにあるダブリンバスの事務所に行って、トラベルワイドという、1日バスに乗り放題のバスを買った。3.3ポンド。とにかく使ってみようと思ひ、橋を渡って、トリニティカレッジ近くから乗ってみた。当然中心部から、郊外に向かって走っていく。住宅街に入ってから下車して歩いて適当に戻ってきた。大きな本屋があったので入る。法律関係のところに行く、家族法関係と、憲法と、これぐらいしかアイルランドのものですよという感じの本は見当たらず、どうも、イギリスみたいです。コミュニティローつまり、ヨーロッパ連合関係の本はあった。家族法には興味があるが、最近状況の変化があるようで、私としてはそういう新しいことを教えてくれる本がほしかったが、見つからなかった。かなりいてから、昨日の市場通りに行って、サンドイッチを食べた。それから、今度は、ダートという郊外電車に乗ってみることにした。コノリー駅に行って、南の方向の終点ブレイという駅までの切符を買う。かなり待って電車が来た。海岸沿いに南下するので海が見え、ビーチが見える。Dun Laoghaireという駅に接した港には懐かしいSTENAラインのフェリーが停泊していて、ここからリヴァプールに行くことが分かった。あらかじめ分かっていたら、飛行機でなく、こちらを使ったかもしれない。電車は適度に込んでいる。私の前に座った青年とそのお母さんはとっても仲がいいようだ。途切れず話し、青年のお母さんに対する気持ちが伝わってくる。くつろいだ気持ちになった。30分ぐらいで終点について、とにかくみんなが歩いていく方に歩いていく。住宅街である。かなり歩いていたらバスが来て、ウィックロウと書いてある。さっきお昼にサンドイッチを食べながらガイドブックを見ていたら載ってい

た。後のことは考えないで乗る。1時間足らず乗って着いた。山も海も川もあるというレジャー向きの町のようなのである。どうも、私向きじゃなかった。それで、ツーリストインフォメーションに行って、ここは鉄道があるので時刻を聞く。16時48分だそう。まだ1時間ぐらいいもあつたのだが、やっぱり疲れて元気が出ないので、駅まで20分ぐらいかかって歩いていき、待っていた。時刻になると10名前後の人が集まったが、切符売り場に職員はいなくて、乗ってから買った。6時にコノリー駅に戻ってきたが、町はがらがらになっている。6時ジャストで閉める店が多い。私も急いで夕食に食べるものを買う。ROCHES STORESというスーパーがまだあいていてそこで買い物をした。市場の通りで、子供たちが通行人に、売れ残りの野菜とか果物とかを投げた。若い女性にあたって、よそ行きのドレスが汚れてふいている。ひどい。冗談じゃない。荒れているなあ。昨日の浮かれた顔は金曜日だったからなのかなあ。早々に引き上げることにする。夜は、書類の整理等をした。

6

8日(日曜日)、6時半に起きて朝食を自分で済ませる。そして、7時半にホテルを出た。バスターミナルに行き、7時55分発のエアバスに乗って、空港には8時20分頃着いてしまう。11時15分発の飛行機なので、いかにも早すぎるのだが、ガイドブックによると、普通のバスは日曜日は10時頃からしか運行しないそうで、実際、朝の通りは死んだように静かで、バスがちゃんとあるのかちょっと心配だったのである。カードテレホンがあったので日本にかけてから、中に入った。ダブリンに来たおかげで、イギリス人とアイルランド人との区別がすぐにできるようになった。イギリス人の顔って、笑っていないなあ。陰気。アイルランドの人って、とにかく空気づくりがうまい。すぐにお話関係になってしまうんだね。エアリングスの機内はおかげでくつろげた。機内で食事は出なかった。国内扱いか。

ヒースローに着いて、1日乗り放題の切符を

3. 9ポンドで買う。そしてまず、ウォータールー駅に行き、明朝ユーロスターでブリュッセルまでいき、さらにアムステルダムまで乗り継ぐ切符を買った。全部で82.5ポンド。思ったより安い。それからヴィクトリア駅に行き、歩いて安宿街に向かう。歩いてほんの5分足らずである。Holly House Hotelというホテルにした。ダブリンのホテルと名前が似ているのでここに決めた。バス、トイレ付きで35ポンド。すぐに出て、ヴィクトリア駅からカードテレホンで沖縄に電話し、ホテルのFAX番号を伝えた。ヴィクトリア駅は、とにかく便利。

朝日新聞の国際衛星版を買う。2ポンド。沖縄の県民投票のことが気になっていた。駅の前はかなり大きな本屋がある。ちょっとのぞいた。駅構内に24時間ショップがあり、食品が充実している。ヴィクトリアの構内にあるシンガポールサムという店で久しぶりにご飯を食べた。ロンドンの人は日本人慣れしてるのかとにかく愛想がいい。日本人が驚くほど多い。ただし、例えば韓国語版の「地球を歩く」をもっている若い女性がいて、日本人と区別がつかない。韓国人とか中国人も多いんでしょう。最初はどこかに行くつもりだったが、背骨が痛いので休むことにした。ホテルに帰ってすぐに妻からFAXで、オランダの件が整った。県民投票は9割がイエスだったそうだ。投票率のことは書かれていなかった。

## 7

9日(月曜日)、5時半にホテルを出て、地下鉄でウォータールー駅に行く。飛行機みたいにチェックインして、6時53分発のユーロスターに乗る。途中から雨になった。11時過ぎにブリュッセルに着く。オランダギルダーをベルギーの金に小額両替して、それでサンドイッチとカプチーノを買い食べる。うまい。12時10分発の列車に乗ってアムステルダムに向かう。ロッテルダム、ハーグ、ライデン等順に過ぎて3時過ぎにアムステルダム中央駅に到着。歩いてダム広場まで行く。だいたい大きさの感覚がつかめた。ダム広場から左に折れたところにあるホテルがガイドブックで紹介されていたが、

2日はいいけど3日目は満員といわれる。それで、ダム広場から更に真っ直ぐ行ってちょっとのところにあるRokin Hotelに決めた。2つ星である。1日90ギルダーで3日分270ギルダーを払ってしまった。屋根裏部屋になって、階段が急なものだから昇降はラクじゃなかった。しかし、部屋には洗面台があり、清潔で悪くない。斜めに傾いた天井も結構だ。

ホテルを出てから、まず、ホテル前にある、KLM代理店と書かれている旅行社で帰りの切符の再確認を頼んだ。すると係の女性が、この切符はロンドン-アムス-東京となっていて、連続する形になっているので、ロンドンからでないと乗れないというのである。とにかく予約の確認だけでもと思って頼むと、何やら話していて、アムスから乗れるかどうか東京に問い合わせることになったそうで、明日夕方もう1度来なさいというのである。参った。もしロンドンからでないと乗れないというなら、とんぼ帰りしないといけない。が、まあ、どう転んでも乗れるのだからと自分を慰める。それからアムステルダムを歩いたが、切符のことが気にかかって元気が出ない。とにかく、食べ物を買って、ツナサンドを食べてからホテルに戻る。シャワーを浴び、ビールを飲みながらメモを書いたりしていたら寝てしまい、2時頃目がさめる。明日バンリヤ財団で手渡すための文章を英語で書く。書き上げてまた寝る。

## 8

10日(火曜日)、7時前に起きる。8時にホテルで朝食後駅に行く。8時半の列車でまずスキポール空港に行く。ハーグに向かう途中に空港があるので、空港のKLMチケットカウンターで切符のことをたずねてみたのである。ノープロブレムだそうで、アムステルダムから乗れるという。考えると、東京で問題のあることをやるはずがないと思う。安心し、気持ちが晴れた。それから、ハーグH. S駅行きの切符を買ったが、先にハーグC. S(中央駅)行き列車が来るのが分かったので、新たに買い、最初の切符は捨てた。オランダでは、まず必ずといってい

いほど車内検札がある。ハーグC. S駅に10時過ぎに着いた。結果的には、C. Sにしたのは非常にいい選択だった。駅から市電が出ていて、地図があったので、これから行こうとしている財団の場所をさがしていたら、案内係みたいな人2人が近づいてきて、どこに行きますかと。住所を言うと、詳しい地図を取り出して、トラムの7番だそうだ。いいんだが、地図を持ってないので、降りてからが分からない。タクシーにする。道は割と単純で、しかし距離は結構あった。25ギルダーちょっとである。運転手さんに1ギルダーぐらい余計に出したら喜んでくれたようだ。

財団にいきなり行ったにもかかわらず、会いたい人にちゃんと会えた。伝えたいこともちゃんと伝えることができたし、まあ目的を達したというべきである。わざわざ来てくれたのかということでも非常に喜んでくれたように思われる。用件が済んでから、財団の中をちょっと見学させてもらい、昼食を一緒にという誘いはお断りして、辞去する。

さっそうと出たのはいいが、方向がよく分からない。最初はタクシーを拾えないかと思ったが、無理だね。トラムもどこに行くのか分からない。近くに、ホテルがあったのでいってみたが、タクシーはゼロ。皆車で来ている。ガソリンスタンドがあるのに気づき、地図を売っているのではないかと思っていってみるとあった。買う際に現在地と、駅の場所を教えてもらった。今地図で測ってみると3.5キロほどである。歩いて大きな通りを戻ってきたが、車道のほかに自転車道、そして、歩道と別々にあり、立派なものだ。オランダでは、自転車道はよく整備されている。ただ、その自転車というのは大きく、やたらに速いのである。うっかりひかれたら、死ぬことだってあるのではないかと思う。アムステルダムなどでは実際危険を感じた。車道に茶色の色をつけたところなども公園付近などにはあるが、日本の感覚だとそれが歩道にみえてひかれそうになる。歩いて、何度か地図を確認していると人が近づいてきて、どうしたんですかときいてくれる。親切。まちはとにかくよく整備されている。駅前に戻ってきたら、ちょうどデルフト行きのトラムが来た。迷わず

に乗る。6ギルダー。切符はゾーン別になっていて、3ギルダーの切符を2枚くれた。

デルフトには日本を出発するときから行こうと思っていた。私は都市交通のことをいろいろ調べているが、以前、内橋克人・鎌田慧「大震災 復興への警鐘」(岩波書店・1995年)を読んでいたら、デルフトのことが書かれていた。「ボンネルフ」(人々が憩う場、日常的な生活の庭という意味)という言葉が出ていて、オランダのデルフト市では、街路を含む住宅地とかをみんな生活の庭と考え、庭にふさわしい範囲でのみ自動車利用を認めるのだそう、そうすると車道と歩道を分離しないということになる。分離すると自動車専用道路網を張りめぐらすことになり、車優先、交通爆発の引き金になると。それを実際に見てみたかった。トラムでデルフト駅前に来るまでかなり町の様子は分かったが、車道と歩道とは分離されていた。変だなと思い、ガードをくぐって駅の反対側にいってみた。あった。Woonerfという標識が立っている。そこは確かに団地というかまとまった住宅地になっていて、そもそも歩道と車道を分けることができるほどの幅もない。日本の団地と別に変わらない。家々の前が駐車場になっているが、むしろ車は別のところに置いたほうがいいんじゃないかとさえ思われる。今交通量自体を減らすことが必要であるといい、ただ高速で走ればいってものではないという考えが浸透してきていると聞いていたので、オランダなどもっと車が少ないかと思っていた。トラムとか確かに公共交通は整備されているのだが、しかし、車もまた多い。しかもとにかく速い。ゆっくりやりましょうという感じはない。

駅側に戻り、トラムの通りから外れて中心部にいってみた。運河が縦横に走っている。運河際の道も車道と歩道は分離されている。歩いていくとやがて大きな広場に出る。教会がありここが中心のようである。真ん中に「国際法の父」グロチウスの像がたっていた。デルフトは陶器で有名で、そのお土産屋がある。町の中をわりとていねいに回ってから、駅に戻り列車でアムステルダムに帰ってきた。途中ハーレムを通った。アムステルダムについてから、昨



日行った旅行社に行ってみた。ホテルの前なのだから、間違はずはないのだが、その旅行社がなくなっているのである。何度も行ったり来たりしてみたがないのである。で、1軒空いた店があって、どうもそこだったように思われる。朝自分で空港に行っておいてよかったと思ったが、何か不安になった。いや、私の切符は格安チケットなので乗れなかったらそれでおしまいである。でもどう考えても、ロンドンまで行って、そこから乗るなんてばかっている。乗れても乗れなくても、アムステルダムにしようと思った。アンネ・フランクの家歩いていく。入館料10ギルダー。ホテルと同様、とにかく階段が急である。障害者とか、老人とかはとて無理じゃないか。日本語の本があったのでそれを買って、絵葉書も何枚か買った。それから、買い物も兼ねてゆっくり散歩した。着いた当初はスーパーが見つからなくて、観光客だけのための町みたいで不便を感じたが、歩けばいろんな店がある。歩いていて、あるいはハンバーガー屋で食べたりして感じるのは、猫が多いということだ。100ギルダーのお札の透かしが猫のような動物である。寒いので、6時前にホテルに引き上げてきた。ちょっと高くても部屋にテレビがあるといい勉強になるのにと後悔する。が、集まった資料を眺めていると、いい旅をしているとも思う。

## 9

11日(水曜日)、8時前にホテルで朝食後、駅に行って、8時36分発の列車でレーワルデンに向かう。片道44.50ギルダー。10時55分着。レーワルデンは、オランダ北部にあるフリースランド州の州都である。ここには少数民族フリースラングが大勢住んでいるということで、どんな顔の人たちなのかと、それを見に行った。ガイドブックによれば、フリースラングは言語・文化ともスカンジナビア諸国に近く、歴史的にもとりわけデンマークに近いのだという。また、「ホモ・ルーデンス」を書いたホイジンガがこの人だそうである。行ってみると、瘦せ型で、顔もとがった細長い顔が多く、非常に色

の白い人たちのようである。ちょっと違うな、確かに。歩いて町の中心部に入り、フリース博物館に行く。博物館は新しい建物に移転していて、今も移転作業中のような感じだ。絵が多い。戦争中の展示の中に、ワタナベという名前のきれいと、薬品のチューブのようなものが展示されていた。インドネシアだろうか。

走るようにして駅に戻ってくると、12時09分発のアルクマール行きバスに間に合った。28.75ギルダー。このバスは、大堤防の上を通過して、アイセル湖の西岸に行くのである。大堤防は25キロぐらいある。アルクマールには1時50分頃に着いた。この町は、チーズの競り市で有名である。それから、14時08分の列車に乗ってアムステルダムに戻ってきた。10.75ギルダー。アムステルダム駅構内のセルフサービスレストランでスープとサンドイッチを食べた。それから駅の売店で、朝日新聞の国際衛星版を買う。7.5ギルダー。大田沖縄県知事と橋本首相の会談がトップニュース。天声人語によれば、県民投票の投票率は59.53%だったそうで、これは低いなどびっくりする。これで決まりだなと思う。朝日は沖縄に好意的だが。

1番のトラムに乗って博物館に行こうと思い乗る。しかしいくら乗っていてもそれらしい場所に出ないので、ちょうど勝鬃橋のように橋があがって、その手前でバスがストップしたところで降りる。地図を調べ、Vondel Park内を歩いていく。すばらしい公園である。地図を見ると、コンセルトヘボールが近くにあり、その前にKLMの予約センターがあるので、そこにまず行ってみた。ちょっと順番を待って、アムステルダムから乗れるかどうか確認すると、やはり問題ありませんということだった。気にかかっていたので、すごく嬉しかった。ただ時間がもう4時半近くになっていて、博物館等は多分閉館30分前までしか入れてくれないので、走って一番そばにあるゴッホ美術館に行った。ぎりぎり間に合った。30分ではとても見切れないが、だいたい見たことのある絵だし、浮世絵がどの程度展示されているのか興味があったのでそれが見られただけでもよかつ

た。だいたい、これでいいだろうということで、あと、ぶらぶら歩いてアムステルダム中心部に戻る。本屋とスーパーを見るのに時間をかけた。スーパーに酵母を使ってないパン（Nun）を売っていたので買った。6時ごろにはホテルに帰り、ワインを飲んで寝てしまった。途中一度目がさめたが、翌朝まで寝た。

## 10

12日（木曜日）、荷物整理を済ませ、朝食後、チェックアウトし、9時の列車でスキポール空港に行く。10時半にチェックインを済ませて中に入る。お土産を空港内で買おうと思っていた。しかし、わざわざ買わないといけないようなものが見つからず、結局キーホルダーだけになった。14時55分発KL861便は予定より1時間遅れて出発した。隣の席が空いていてラクだった。

13日（金曜日）朝10時頃成田に着いた。

（旅行記：1996・10・10 脱稿）

（1997・1・12 脱稿）